

〔人倫訓蒙圖彙六〕白粉師 おしろいは鉛をむして水飛するなり、

〔都風俗化粧傳中〕白粉を製傳

生白粉ましろこの製法は、鉛を酢にてむし、水に晒し、かためしもの也、輕粉せしものをかへ或は白粉の木にて作るといふはあやまり也、

生白粉を製て、これを三段にわかつ、極細末の宜きを生白粉ましろこといふ、其次を舞臺香ぶたいかうといふ、芝居しげしろつかふなり、其次をとうの土つちといふ、安き白粉也、

調合てうごうおしろいを流し。白粉しろこと云、これを丁子香、蘭の露、菊の露、袖の香など銘をつくれど、みなおなじ流し白粉にて、名のかはりたる計のもの也、上々の白粉の製やうは、生白粉也、上々白粉を製には、生白粉にほだ等分に合せ、ままりを少し入る、なり、中の白粉は、生おしろいとちんくすと等分に合せて、ままりを少し入たるもの也、白粉に香具をあわせ、香あるものにあらず、みな付たる香ひなり、香ひある白粉をよしと思ふはあやまり也、

〔都風俗化粧傳中〕粉おしろいの傳

流し白粉をよく細にし、絹にてこしふるひてつかふべし、早くする仕様は、此粉を絹につゝみ、ふるひ通してつかふべし、

〔本朝世事談綺器用〕白粉

慶長元和のころ、泉州堺錢屋宗安と云もの、大明の人に習ひ、はじめて造る、又小西白粉は堺の藥種屋小西清兵衛小西攝津守父也大明に入て習得たる所の法也、小西和泉大目此裔といへり、近世本朝の白粉甚勝れたり、よつて異國人是を買去る、

〔嬉遊笑覽一容二〕粉シロキモノに二種あり、故に和名抄にも粉ハフネと並べあげたり、本草和名に粉錫、和名巴

白粉種類